

旅と文化

発行所
財団法人全国修学旅行研究協会
東京都千代田区
神田神保町2~30
電話(33)0168
編集人 永井 照
発行人 永井 照

第二回理事会開かる

新段階を確認し事業推進を誓う

昨秋の財団法人設立後、約四カ月ぶりで第二回理事会が三月十四日、十時から、山本理事長、永井、村山、岡本各常務理事、馬場、河野、仲沢、伊藤各理事出席のもと、東京修学協本部で盛大に開催された。今回は新年度準備の新年算、事業の検討と、三月二十一日、山陰、中国、四国を皮切りに行われる各ブロック会議の議案の検討が主な仕事であった。会議は藤村総務部長司会のもとに開かれ、山本理事長の全修協組織活動の全国的実情、特に全国支部設立における同志の温かい友情による団結、財団法人に基く画期的な意義等についての力強い挨拶があり、続いて永井事務局長の経過報告があつて別項のような協議題について熱心な討議が続けられ、夜の七時半過ぎまでかかるといふ大規模なものであつた。

協議題

第一号議案、全修協協会の徹底と活動方針に関する件については、(一)全修協組織の現状特に従来の組織との差異、財団法人となつての意義、本部支部組織および機構については、理事長に任命された(二)活動方針については別項のように示された目的事業

について再確認し、これの達成に漸進的努力を傾注することおよび協力事業について協議した。

第二号議案、三十三年度予算案らびに事業計画に関する件については、(一)予算は目下慎重立案中、総体的には全国組織体としての事業活動遂行上必要最低の財源は十分考慮すること(二)事業計画については別項のような決定をみた

と参加者集議についての対策を協議した。

第五号議案、修学旅行の組織化に関する件については、修学旅行の安全と快適のためにその組織化を緊急に推進する必要があること、そのための対策が協議された。

第六号議案、その他の件については、月報の発行が要望され、今後各支部が月ごとの支部活動状況を本部に報告すること、本部は下記の通りである。

新しい同志的結合を固めた 新任支部長協議会

青森県盛岡三喜雄氏(前教組委員長) 岩手県砂子由次郎氏(元県教育委員) 富山県木田喜作氏(元県教育委員) 東京都青山良道氏(現都議会議員) 愛知県宮本秀吉氏(前学校長会長) 滋賀県垣見基一郎氏(現教育長) 山口県宮本吉正氏(現県教育委員)

協会は十時から本部において開かれ、(一)組織に関する件(二)支部長役員に関する件(三)支部運営に関する件(四)当面の事業活動に関する件(五)その他について協議したが、いづれの案件も新任者としての緊急必要事項のみで、各支部長の力強い共鳴を得、今後各県において大活動を開始することを誓ひ合つて解散した。

中国 四國 ブロック会議

全国にさきがけて山陰、中国、四国ブロック会議が、去る三月二十一日、高松市銀星旅館で開催された。

この日、瀬戸内海の朝もやをついて駆けつけた支部長は、雲山のふもと銀星旅館の会場に定刻までにぞくぞく集合した。この会議には支部長(若しくは副支部長)と事務担当者の出席を願つておたが種々の事情で事務担当者の出席があつたのは岡山県、山口県のみであつた。

本部からは山本理事長、永井事務局長が出席、会議は十時半から別項のような議題で開始され熱心な討議の後、全議題とも異議なく承認、十七時終了した。

(一)組織運営に関する件
(二)支部運営とその活動に関する件(三)三十三年度研修旅行実施に関する件(四)修学旅行の組織化に関する件(五)その他に関する件

特に議論が集中されたのは、研修旅行の件であつた。昨今の今ごろと比較し参加状況の悪い理由として、旅行日数の増加、負担の増大が影響しているという見方も相当強かつたが、一面、昨年の実施は老巧となり、あつては時期的に適切な手を打つことを準備中であること、教組の組織以外、校長および教頭に十分了解作業をして応援を得ることが強調された。

支部組織の完成に際して

修学旅行にまつわる封建制をたちきれ

「旅と文化」第一号の本欄において、修学旅行の旨点として、①教育上の正しい位置づけがされていなく、②輸送、宿泊機関等の教育的協力の不足、③貧困児童生徒の不参加等をあげ、これが解決には、学校は勿論、修学旅行に関係する諸機関、一般世論の総力が鍵となるが、財団法人全修協が全国組織を充実して、最も切実な現場の問題から積み上げ、問題解決の原動力となり、目的貫徹に邁進する決意である。」と主張していることを、四十六都道府県に同志を結束して、強力な支部組織が完成された今日、再び思い起し、行動の指針として、胸に刻むべきである。

支部の構成は、幼稚園より大学までの校種をもち、会員はすべて教育関係者で、教員組合、その他の教育団体、教育行政関係者、教員個人、望のある学識経験者、なかんずく婦人会の参加をえているのであつて、日本の教育上、他国にはみられない歴史と特別の位置をもつ修学旅行の問題に取組むには、これに勝る強力団体はありえないのではないか。しかも、これら各層は共通の理想をもち、温かい友情で結び合つている同志の結合体であるので、その行動力は驚異を放つことを言をまたない。

昨年十一月廿一日に、財団法人としての記念式をあげてより、四ヶ月を経過した中で、北海道より鹿児島にいたる四十六都道府県に支部組織は全く完成したのであつた。教育史上、特筆すべきことであると思ふ。

一、修学旅行の教育学的説明
二、旅行修業者の近代的経営への推進

以上二つのことが、公益法人としての全修協が支部組織をあげて、取りくむべきテーマであり、ここで問題を究明することが、修学旅行の旨点を解消できることである。

国鉄が修学旅行の児童生徒の取扱いを貨物並みに考えているかみえること、旅費が高率の対策として利用

することも、修学旅行がレクリエーション的な考え方で世間から見られ、当事者も、それに理論的な反論が十分にできないならば、きびしい世論となつて、国鉄・旅運に反省を求めることはできない。

輸送業者も近代的経営に進まなければ、サービス料金が合法化されず、客の二六勝負に疲れるだけではないか。

「お伊勢詣り」が小学校の修学旅行のモデル・コースとなつていふことにもみられるように、何か封建的色彩が強いのが修学旅行の旨点なのである。

修学旅行の近代化——そのためにこそ、全修協都道府県支部の啓蒙運動を期待してやまない。

全修協第一回作品 修学旅行映画16 クランクアップ近し



◇撮影中のスナップ◇
(左) 父兄の見送りを受けて元気に奈良駅を出発
(右) 箱根火山の模型による修旅の事前教育

映画による修学旅行の事前教育 てくれた。三月二十四日はいは今日既に常識となつていふ。よき草中修学旅行が東京方面へ全修協本部は奈良市若草中学校 出発、ロケ隊(カネノ前部四二二年生三百五十名の東京コース 諸教諭は、修学旅行の進行に三月六日よりクランクを開始 たがつて箱根、湘南、江の島、した。修旅の事前教育や非常退 羽田、東京方面へと撮影を続け選訓練などは、中村校長や松浦 田、木枝教諭等の熱心な指導 いて大部分の撮影を終り現在整のもとに撮影を行い、奈良駅出 理由である。完成は五月上旬の発のシーンでは出発期前にも 予定であるが、この映画の上映かわらず、わざわざ国鉄当局 を希望される学校は各県支部が特別に列車を動かして協力し 通じて聞かせられたい。

